

『更級日記』の富士山描写解釈に関する二三の問題

——色彩を知り、装束を知ることの重要性を反芻する一契機として——

森 田 直 美

一 はじめに

「古典文学における色彩」研究は、その草分けである伊原昭氏により基礎的資料の整備、研究方法の確立がなされ、古典文学、とりわけ平安朝文学における一つの研究分野として認知されるに至った。昨今でも、個々の作品・場面について、色彩や装束の描写のされ方を視座として論考が呈されることも少なくない。では、現在の平安朝文学研究の場は、平安朝における色彩や装束に対して深い理解を有するようになっていだろうか。

筆者は以前、平安朝の和歌や散文に散見する「みどりの空」という表現を起点として、古代における色彩語「みどり」の色相領域について論じたことがある⁽¹⁾。そして、古代の「みどり」は現代と異なり、blue⁽²⁾の領域をも包含する色彩語であったと結論した。この論中にも記したが、古代と現代では各色彩語の網羅する色相領域が異なる場合があるにもかかわらず、現在の平安朝文学研究の場は、必ずしも、その経歴を強く意識しているとは言いがたい。

また私たちは、多くの平安朝文学作品に登場する装束や染色に関する描写に対し、その実相を理解し、具体的な像を思い描くことが

できているだろうか。例えば、『伊勢物語』初段に著名な詠「春日野の若紫のすり衣」などは、従来注では「若紫で摺った衣」などと解説される場合が多いが、「若紫」とは一体どのような染料か、またそれで摺った衣とはどのような装束であるのか、具体的なイメージをもって記された注は、非常に少ないのではないかと思われる。このような点から考えてみると、未だ平安朝文学研究の場は全体的に、平安朝の色彩や装束に関する事項に、やや疎い状況にあるのではないかと推察されるのである。

では以下に、具体的にひとつの場面を取り上げ、現在の平安朝文学研究における色彩や装束に対する注解の問題点を示したい。掲出するのは『更級日記』の上洛記の一節である（以下、本稿における引用本文中の傍線は全て筆者による）。

富士の山はこの国なり。わが生ひ出でし国にては西面に見えし山なり。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿の、紺青を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなかつもりたれば、色濃き衣に、白き相着たらむやうに見えて、山のいただきのすこし平らぎたるより、煙は立ち上る。夕暮は火の燃えたつも見ゆ。

孝標女は、上京する途中に目にした富士山の様子をこのように表現している。ここで注目したいのは、傍線部「さまことなる山の姿の、紺青を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなくつもりたれば、色濃き衣に、白き相着たらむやうに見えて」である。本稿では、この富士山描写の中で、特に色彩表現と装束の喩えを中心とし、先学による訓注・論考の問題点や、今後更に検討されるべき視点を三点取り上げ、考えるところを述べてゆく。

二 紺青を塗りたるやうなるに

さて、孝標女の富士山描写について、まずは山肌の色を表した「紺青を塗りたるやう」という描写を見てゆく。この描写は、『蜻蛉日記』中巻末尾近くにある、

遠山をながめやれば、紺青を塗りたるとかやいふやうにて、「霰降るらし」とも見えたり。

という一節に影響を受けたものであることが、既に先学によって指摘されている。確かに、両作者の関係性を鑑みると、その蓋然性は高いと思われる。特に「紺青を塗る」という表現は、平安朝文学作品に他例を見出し難い。すなわち、「紺青」は色彩語としてはなく、顔料として捉えられているのである。この点も、二つの作品の表現に影響関係があることを推察させる。

また、『更級日記』上洛記の中には、他にも前代の日記文学作品や物語作品の描写を摂取したと考えられる箇所が見える。例えば、『くろとの浜』に滞在した際、そこで見た海辺の景色を、

かたつ方はひろ山なる所の、砂子はるばると白きに、松原茂りて、月いみじう明きに、風の音もいみじう心ほそし。

と、孝標女は表現している。これは小谷野純一氏が指摘されているように、『土佐日記』の著名な一節、

黒崎の松原を経て行く。ところの名は黒く、松の色は青く、磯の波は雪のごとくに、貝の色は蘇芳に、五色にいま一色ぞ足らぬ。

を、意識した可能性のある描写である。更に、孝標女が「もろこしが原」に至った際、従者が孝標女に、

「夏はやまと撫子の、濃くうすく錦をひけるやうになむ咲きたる。これは秋の末なれば見えぬ」

と言ったことが語られているが、この傍線部を付した箇所は『源氏物語』藤裏葉巻末尾近くの、

夕風の吹き敷く紅葉のいろいろ濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上見えまがふ庭の面に、
を意識した叙述と思われる。⁶⁾

このように、前代の作品に見える自然の景の描写を所々に摂取している点もまた、富士山の山肌描写「紺青を塗りたる」が『蜻蛉日記』の遠山描写に影響を受けていると考える一傍証となるだろう。

さて、ところでこの『蜻蛉日記』の遠山描写で気になるのは、「紺青を塗りたるとかやいふやうにて」という叙述の仕方である。

これは何か引用元があることを想像させる書かれ方ではないだろうか。しかもその後、「霰降るらし」とも見えたりと続く。この「霰降るらし」は、「み山には霰降るらし外山なるまさきの葛色づきにけり(古今・神遊びの歌・一〇七七よみ人知らず)」を引いたものである。無論、「霰降るらし」とも、付加の表現がなされているからと言って、「紺青を…」の箇所も他の典籍を引いたものだと

言い切ることはできない。しかし、「とかや」という伝聞調の表現や、後の「霰降るらし」引用への文脈の繋がりから考えれば、やはり何か別の作品や、当時口伝で広まっていた話などを踏まえていると推察される。

ここで、この表現の出所を探る一つのヒントとして、『今昔物語』巻二十の第十話の概略を挙げる。当話は、陽成天皇の御代に、陸奥国へ遣わされた滝口の武士・道範が、道中の信濃国で体験した奇怪な出来事について記されたものである。道範は、信濃国の宿で不可思議な体験をする。後日、それを仕組んだ土地の郡司に、その奇術を教えてくれるよう懇願したところ、郡司はこれを承諾した。そして共に深山に入り、修行することとなる。やがて道範は郡司に、修行の一環として「川上から現れるものが何であっても飛びかかって抱きつくように」と命じられ、川下で待っていると、大蛇や大猪が現れる。道範は抱きつくことが出来ず、その奇術を身につけることができなかった。その川上から現れた大蛇は、作中では次のように表現されている。

暫許見レバ、河ノ上ヨリ、頭ハ一抱許有蛇ノ、目ハ鏡ヲ入タルガ如クニテ、頸ノ下ハ紅ノ色ニシテ、上ハ紺青緑青ヲ塗タルガ如クニ、ツヤメキテ見ユ。

私に、上代・中古の主要文学作品や、大蔵経所収の仏典、また六朝、初唐から中唐の主だった中国漢籍を調査したが、「紺青を塗ったような」という表現が確認できたのは、右の『今昔物語』、及び同話が所収されている『宇治拾遺物語』（巻九ノ一（二〇六話）のみであった（ここでは大蛇の色は、「背中は紺青を塗りたるやうに」とされる）。

当話と、『蜻蛉日記』『更級日記』の描写の関連性は容易に見いだせそうもないが、今後の調査の足掛かりにはなるだろうか。当話は三宝を否定し、奇術を会得しようとした道範が、最終的に酷い目に遭うという顛末を描いたもので、逆説的な仏教推進の内容となっている。また、『往生要集』中巻に、阿弥陀仏の螺髪が「紺青にして稠密、香潔にして細軟なり」と表現されているように、「紺青」は仏の髪の色というイメージのある色彩でもあったと思われる。このような点を踏まえると、「紺青を塗ったような」という表現は、仏典や仏教説話などにゆかりする表現なのかと推察されるが、今は想像の域を出て得ない。大方の御教示を待つと共に、今後引き続き調査してゆく所存である。この箇所の引用元が明らかにできれば、『蜻蛉』『更級』における表現的效果など、考えるべき問題が広がってゆくだろう。

三 色濃き衣

次に、本稿冒頭近くに掲出した当該場面の傍線部にある「色濃き衣」について考えてみたい。この「色濃き衣」は、従来注では主に「濃い紫の衣」と注されている⁸⁾。しかしなぜ、「紺青を塗りたるやうなるに」と表現した山を、言葉を変えて「色濃き衣に」と言った、その「濃き」を「紫色」と解することができるのだろうか。文脈に沿って読めば、これは「濃い紺青色の衣」と解するのが妥当ではないのだろうか。無論、「色濃き衣」を「紺青色の衣」とする注もあるのだが、「濃紫の衣」とするものに比べれば少数派である。

前述したように、「紺青を塗る」という表現からは、これを顔料から生み出される色だと認識していることが窺える。「紺青」は基

本的に藍銅鉍（アズライト）などの天然鉍石を原料とする、顔料を元とした色なのである。その色が、「衣」という染色物に喩えらるるということは、色の原料の意識が顔料から染料に移行しているということの意味する。あるいはこの意識の移行を念頭に置いて、従来注は「紺青を塗りたる」ような富士山の山肌の色は、イコール「濃紫の衣」の色だと理解するに至ったのだろうか。しかし、例えば『竹取物語』には、阿倍右大臣が手に入れた偽りの「火鼠の皮衣」を、この皮衣入れたる箱を見れば、くさぐさのうるはしき瑠璃を色へて作れり。皮衣を見れば、金青の色なり。毛の末には、金の光し輝きたり。

と、表現した個所がある。このように、金青（紺青¹⁰）は顔料名としてだけではなく、衣の色を指し示す際にも使用されていたのであるから、たとえ色の記述の意識が顔料から染料に移ったとしても、これは「濃い紺青色の衣」と解されてしかるべきだろう。

先学の多くがこれを「濃紫の衣」とした思考の経緯は定かではない。しかし、要因の一つとして考え得るのは、「濃き」という言葉にミスリードされた可能性である。

平安朝文学において、装束など、染色物を「濃き」「薄き」といった場合、それは紫か紅のいずれかを指すと考えられている。¹¹そして、「紺青と紫は色相が近い」という判断から、これを「濃紫」と解したのではないだろうか。

しかし、「濃き（薄き）衣」が紫か紅を表しているとされるのは、「濃き」「薄き」が指す色について、何も言及がない場合であった、前に「紺青」の語を伴う当該場面は、これに当たらないだろう。例えば、『源氏物語』若菜下巻中に描かれる女楽で、紫上の纏う装束は、

紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小桂、薄蘇芳の細長に御髪のためれるほど、

と表現されているが、この「色濃き小桂」は当然「葡萄染の濃い色の小桂」の意であるのと同様である。

また、ある色とある色の色相が「近似している」という判定は非常に主観的なもので、「紺青」と「紫」の色相が近いか否かという判断そのものに異を唱えるつもりはない。ただ、「近似」という判断で、紺青≠紫という扱いをすること事態が、あまりに現代的であるように思われるのである。

確かに紫根染は、染め方によっては青みが強く出る場合もある。それは、色相としては紺青に「近似している」と言うことができるのかもしれない。ならば、紺青と同じく、blue の色相を示す縹ならどうか。紺青が色味の出方によって紫に近似していると捉えられるならば、縹も濃きによっては、紫に近似していると言えなければおかしい。しかし、高位高官の衣の色であり、禁色の対象ともなる紫と、下位の当色である縹を「似ている」と捉える感覚は、平安朝の人々にはあり得ないだろう。

化学染料の時代を生きる我々とは異なり、古代の人々の色彩感覚は、色相そのものだけではなく、多分に染料（顔料）の意識と結びついている。それぞれの染料には、それぞれの価値があり、染めの難易度にも差がある。例えば、紅と藍の掛け合わせで染める二藍などは、濃きによってはまさしく紫根染と見紛うような色相を示す場合がある。しかしそれでも、紫根染によって生み出された色と同一に扱われることはないだろう。また、蘇芳と紅は、同じく red の色相範囲にカテゴライズされる色相と言えらるだろうが、それぞれ

の染め衣に見出される価値には格段の違いがある。逆に、もし近似した色相同士の価値を、元となった染料ですみ分ける意識がないのならば、禁色などという制度は、平安朝に存在する必要がなかっただろう。現代の私たちが平安朝文学にあらわられる色彩表現を論じる際には、常にこのような、現代と古代の色彩に対する捉え方の相違を念頭に置くことが、根本的な意識として求められるのである。

四 白き相

以上、「色濃き衣」についての従来注の問題点から、平安朝文学における色彩を捉える際必須となる意識について述べてきた。そして最後に、「白き相」について記したい。

繰り返しとなるが、「紺青を塗りたるやう」と表現された富士山の姿は、「色濃き衣に白き相きたらむやうに見えて」と、装束に喩えを変えて再度描写される。この装束の喩えは、例えば秋山虔氏校注の新潮日本古典文学集成『更級日記』に、「紺青色の山が白雪を頂いているさまを、童女の相姿にたとえた」と注されているように、童女の装束に喩えられたと捉えられることが多かった。¹³筆者もこの捉え方を妥当なものと考えてきたが、近年、これを童女装束と捉えることに對し、疑問を投げかけた論考に触れた。

小谷野純一氏は、中世成立の有職故実書である『飭抄』(中院通方著)の、

一 袖付単衣公卿用赤相、壯年之人着染相(中略)夏帷上付張相帷紅、老人白、白張相云々(以下略)

という記述により、「白き相」に関して、

こういった内容に照らす限り、ここは、白の張相を以つてのイ

メージとして捉えられることになるだろう。

と述べられている。慎重な書かれ方ではあるが、そのまま受け止めれば、これを老人の白い張相を想起させる描写だと捉えておられるのだと読める。また和田律子氏は、小谷野氏のこの注解を「示唆深い」として支持され、更に平安朝文学における「相」の用例や、辞書類の「相」の解説を通覧し、『更級日記』の富士山描写における「白き相」のイメージについて検討されている。そして、

「白き相」は、諸状況から判断して男性の着衣、しかも老人男性の着衣であることは疑えないようである。当該部の「白き相」が童女の着衣とするには無理があり、男性の着衣と解するのが妥当ではないかと思われるのである。

と結論されている。そして更に、この考察を「色濃き衣」と合わせて、
若い人の色である濃い紫色の裏なしの肌着の上に、老人の色である白い肌着風のものを着た姿、これが「色濃き衣に白き相着たらむやうに」の実体ということになる。これはいわゆる平安貴族の一般的着衣の状況からは逸脱した姿であり、当該部諸注解という童女の裾広がりのすわり姿のイメージとはかなり異なったものとなる。

と、富士山を喩えた装束描写が、当時の現実の装束と比べて非常に特異な表現だと見て、更に論を展開されている。

しかし、小谷野氏や和田氏が、なぜ従来の方の注釈書が「色濃き衣に白き相着たらむやうに」を童女の相姿と解してきたのか、その理由を追求されずに、『更級日記』から百年以上も後に記された有職故実書の記述を主な拠り所として「白き相」のイメージを見出

そうとされているのには、やはり即座に首肯しがたい面がある。なぜ、従来注がこの箇所イメージとして「童女の相姿」と捉える場合が多かったのか。その理由は、「相」を襲の一番上に着る装束の形態が、これ以外になかったことにあるだろう。

「色濃き衣に白き相着たらむやうに」と言うまでもなく、富士山の中腹付近まで雪が積もっている景観を、装束に喩えて表現したものである。つまりこれに喩えられる装束は、雪が山を覆うように「白き相」が「色濃き衣」の上に掛かっている襲の形態がイメージされていると思われる。

相は、『和名抄』には「女人近身衣也」と記されているが、実際には男性も着用するものであった。このことは、例えば『紫式部日記』に、「そぞろ寒きに、上の御相ただ二つ奉りたり」とあるように、男性着用の記述があることなどから知ることができる。また江戸中期の有職故実家・伊勢貞丈の『貞丈雑記』に「相と名付故は、単と下襲の間に著こむ故、アイコメの訓にてアコメと云也」と説明されているように、本来は単衣の下、下襲の上に着込むものであった。つまり、表着を重ねると、相は襟元にほんのわずかに出る程度で、その色に目が留まるほど見えるものではない。

しかし、成人ならば男女ともに襲の内側の方に着用する相であるが、童の日常着の場合には、汗衫を着用せず、相が一番表に出る「相姿」という略式形態があった。また、相の一特徴として、丈が他の衣よりも短いことが挙げられる。平安後期成立、源雅亮による『満佐須計装束抄』の「五節所御装束事」に記される「わらはさうぞくの寸ほう」では、相の丈は「四尺一寸」（二〇センチ強）と記されている。童女の身長にもよるが、少なくとも成人女性の衣のよう

に床に引き摺って歩くようなものではなかっただろう。つまり、山の雪を「白き相」と表現するのは、山の裾野まで覆い隠しているのではなく、中腹まで雪が積もっている様子を、足先まで覆わない相の短さに仮託したためだとも考えられる。

『更級日記』の富士山描写のように、自然の景を染色（当該場面では塗色）に絡めて表現したり、装束に喩えたりする表現は、和歌の世界では常套的なものであった。

〈景物を染色に絡めて表現する〉

ちはやぶる神世もきかず竜田河からくれなゐにみづくくるとは

（業平・十八）

あさみどり染めて乱れる青柳の糸をば春の風やとくらん

（伊勢・一〇二）

紫にやしほ染めたる藤の花池にはひさすものにぞありける

（斎宮女御・一四二）

〈景物を装束に喩える〉

春のきる霞の衣ぬきを薄み山風にこそ乱るべらなれ

（古今・春上・在原行平）

あさみどり春を着ぬとやみ吉野の山の霞の帯に見ゆらむ

（忠見・七〇）

山がつの垣根に咲ける卯の花はたが白妙の衣かけしぞ

（拾遺・夏・九三詠人知らず）

以上のような例は、こうした詠みぶりのごく一部であり、この種の詠は枚挙に暇がない。孝標女の富士山描写が、塗色や装束の喩えによって展開される奥底には、こうした和歌的発想が底流していると思われる。しかし、孝標女が「相」の丈の短さを意識して、富士

山に積もる雪をこれに見立てたという私見が正鵠を得ているとすれば、単に「衣」「帯」「袖」などというのではなく、実際の形式に即し、より緻密に、景物を喩えるのに相応しい装束を用いて描写しているという点で、特徴的と言うことができるだろう。

また、平安朝の文学作品における装束描写で「相」が記される場合、その多くは童装束である。以下、童の「相姿」を表現した数例を掲出する。

① 一重襲の綾掻練の相着たる童、髪丈と等しくて、年十五歳より打ち、丈等しく、姿同じき十人。(『宇津保物語』祭の使卷)

② また清げなる童べなどの、相どもの、いとあざやかなるにはあらで、葵えばみたるに、(『枕草子』二二〇段「ものへいく路に」)

③ おかしげなる姿、頭つきども、月に映へて、おおきやかに馴れたるが、さまざまの相乱れ着、帯しどけなきとのい姿なまめいたるに、こよなうあまれる髪末、白きにはましてもてはやしたる、いとけざやかなり。(『源氏物語』朝顔卷)

④ わらはべなどをかしき相姿うちとけて(同 野分卷)
⑤ 氷を物の蓋にきて割るとて、もてさはぐ人、大人三人ばかり、童といたり。唐衣も汗衫も着ず、みなうちとけたれば(同 蜻蛉卷)

また更に、相に言及するのが童装束の描写の特徴という点を確認するために、『源氏物語』若菜下巻で催される六条院女楽を例に挙げたい。ここでは、四人の演奏者(紫上、女三宮、明石女御、明石

御方)と、それぞれが引き連れている童女の装束が記されている。以下に、紫上の童女の装束描写と、紫上自身の装束描写を掲出する。

〔紫上の童女〕

童べは、容貌すぐれたる四人、赤色に桜の汗衫、薄色の織物の相、浮紋の表袴、紅の擗ちたる、さまざまてなしすぐれたるかぎりを召したり。

〔紫上自身〕

紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小袿、薄蘇芳の細長に御髪のためれるほど、こちたくゆるるかに、大ききなどよきほどに、様体あらまほしく、あたりにほひ満ちたる心地して、花といはば桜にたとへても、なほ物よりすぐれたるけはひことにものしたまふ。

紫上自身は小袿、細長が記されているのに対し、童女は汗衫、相、表袴、打衣に言及があり、これは着用した際に表から見える衣の色を記しているものと受け取れる。女楽に参加した他の奏者に関しても同様で、いずれも奏者装束は相の言及がないが、童女は相の色の記述がある¹⁷⁾。

無論、平安朝の文学作品には成人女性や男性の相を記した場面もあるが、前者は童女の例に比べると圧倒的に用例が少なく、後者はそのほとんどが、催しにおいて下賜するべく用意された(もしくはその場で脱いだ)ものの記述である。

このような傍証も含めて考えると、平安朝文学における装束描写で、「相」に関する言及があった場合、当時の人々には童女装束のことを言っていると受け止められる可能性が高かっただろうと推察される。すなわち、『更級日記』の「白き相」が、従来童女装束に

ついて記されたものだと考えられてきたのは、このような理由を総合的に判断しての結果だと思われるのである。

五 おわりに

和田氏が論中に述べられているように、従来の「色濃き衣に白き袷きたらむやうに見えて」に関する注解は簡潔な訳注であることが多く、どのような具体像を描いて記されているのかを窺い知るのが難しい。しかし、その記述の簡潔さを逆照射すれば、従来注が附された頃には、「袷」が記されるのは重装束である場合が多いことや、「相姿」の具体像を、詳しく説明しなくても理解することができていたと考えることができるのかもしれない。

平安朝の色彩や装束は、時代を経るにつれて次第に理解できなくなってゆく。この『更級日記』『白き袷』の解釈問題は、その理解の薄らぎが表面化した一事例だと言ったならば、言葉が過ぎるだろうか。

筆者は以前、「みどりの空」の「みどり」が表す色相についての考察¹⁰を行った際、無品親王が元服時にまとう衣の色「あさぎ」を、考察の資料として用いた。無品親王の元服時に使用されていた装束は、本来「浅黄（あさぎ）色」すなわち、薄い yellow の袍であった。しかしこれが、「浅葱色」と同音であるために混同され、次第に表記も厳密には書き分けられなくなってゆく。その結果、平安中期頃には、無品親王の元服に使用する袍の色目が、本来は緑と黄色のいずれだったのか、分からなくなってしまうという事態に陥る。この混同は、後代の故実家たちを相当に悩ませたらしく、しばしば議論の対象となっていた。九条兼実や中院通方、三条西実隆と

いった、中世の著名な故実家たちが、揃ってその著書に「あさぎ袍」の色相について自説を記している。

兼実などは、著書『玉葉』の中で、「あさぎ」を「是綠色也」とし、結果誤った解釈をしていることになるのだが、ここで筆者が重要視したいのは結果ではなく、故実家達の姿勢である。分からなくなってしまうた装束や色彩の実相を議論し、理解しようと努める姿勢こそ、私たち平安朝文学研究者が継承すべきものだろう。特に、記された色や装束を基に、作品の志向する表現を読み解こうと試みるならば、まずその大前提となる色や装束が、どのような色で、どのような装束なのかというところを精査・確定することが必要で、それを踏まえなければ、積み上げた論の全てが危ういものとなってしまいかねない。

本稿で取り上げた、『更級日記』の富士山描写のような非常に短い描写の解釈の中にも、そうした問題が色濃く見えるのである。この問題を、自戒の意も含め、古典文学研究において「色彩」や「装束」の実相を明らかにすることの重要性をあらためて考える一契機として呈したいと思う。

資料出典

- 平安朝の日記、物語、説話作品の引用は、すべて小学館新編 日本古典文学全集による。
- 和歌は新編国歌大観CD-ROMによるが、一部私に表記を改めた。

注(1) 拙稿「古代における「みどり」の色相領域を再考する―「みどりの空」

を起点として」(『中古文学』第七八号、平成一八年二月)

- (2) 「現代的概念による色相」を指すものとして、カッコ括りの英語表記を用いている。これは、古代の色彩語が表す色相領域について論じた先行論文(例えば、山口佳紀氏「アラとミドリー平安仮名文学の文体」(『古代日本文体史論考』所収 有精堂出版一九九三年)や、中村一夫氏(松の緑と柳の青ー中古期における色彩語の表現価値)、『日本語研究センター報告』(一九九五年十一月)など)で、「現代的概念による色相」が英語表記されていたのに倣ったものである。しかし、BlueやPurpleといった英語にもそれぞれの語義があるため、それを指すものではなく、あくまで記号的に用いるということを示すために、本稿ではカッコで括る表記とした。

- (3) 坂徴の『蜻蛉日記解環』に指摘されて以降、諸注が触れている。近年では小谷野純一氏『更級日記全評釈』(風間書房一九九六年)など。また、和田律子氏は『藤原頼通の文化世界と更級日記』(新典社二〇〇八年)、『更級日記』の「紺青」は、「竹取物語」の火鼠の皮衣の色である「金青」に影響を受けた表現で、異国情緒を思わせ、物語的世界に繋がる描写だと論じられているが、両作品の叙述の有機的な繋がりが見出せない以上、即座には首肯しがたい。

- (4) 前掲注(3)の小谷野氏著書。

- (5) 孝標女はおそらく、色彩語「赤」を月の「明さ」との音の共通性によって表現したものと思われる。こうした発想の源は、例えば次のような先行歌の表現にあるだろう。

くらぶ山秋の月夜に見ればあかし嶺に紅葉やいとど照るらん(好忠・二六五)

白妙の白き月をも紅の色をもなかあかしといふらん(拾遺・雑下・五一八 藤原伊衡)

- (6) この藤裏葉巻の紅葉の描写は、直後に記される冷泉帝の歌「世の常の

紅葉とや見るいにしへのためしにひける庭の錦を」に繋がってゆく。『更級日記』が『源氏物語』のこの箇所を撰取した可能性は、従来指摘されていない。「夏はやまと撫子の、濃くうすく錦をひけるやうになむ咲きたる」と、本当に従者が言ったかどうかは判然とせず、『源氏』を意識した孝標女の脚色とも考えられる。また、小谷野純一氏は(前掲(3)の小谷野氏著書)、「常夏のはる庭は唐国に織れる錦もしかじとぞおもふ(後拾遺・夏・二二五 定頼)」といった、和歌表現の影響を指摘されている。この指摘は首肯すべきものであろうが、発想源の一角に、『源氏』の描写の影響もあつたものと考えたい。

- (7) この箇所は諸本により異同があるところで、桂宮本、彰考館文庫蔵本などでは「紺青をぬりたるやいふやうにて」となっている。

- (8) 三角洋一氏校注・訳『更級日記』(建礼門院右京大夫集)(ほるぶ出版一九八六年)、原岡文字氏訳・注『更級日記 現代語訳付』(角川ソフィア文庫二〇〇三年)、和田律子氏前掲注(3)著書など。

- (9) 島津久基氏校注 岩波文庫『更級日記』などでは、「色濃き衣」を「色の濃い紺青の衣」としている。

- (10) 『竹取物語』本文は、新編日本古典文学全集に拠つたため、「こんしゃう」の表記は同書の表記「金青」のまま引用したが、『竹取物語本文集成』(王朝物語史研究会編、勉誠出版二〇〇八年)で確認できる伝本では、全て平仮名表記である。『伊呂波字類抄』によれば、「金青」「紺青」は同意と解説されているが、その是非や、本来いずれの表記が妥当であるのか等については、なお検討が必要だと思われる。

- (11) 現在、「濃き」「薄き」という場合、特に色の指定がない限り、「紅」か「紫」を指すと考えられているが、筆者はこの考え方の是非について、再考を要すると考えている。また、この考え方が妥当である場合、「紅」と「紫」のいずれを指すかは、どのように判別すべきなのだろうか。そうした点について、別稿で検討する所存である。

(12) 別の染料での掛け合わせもある。

(13) 前掲注(8)のほるぶ出版(三角洋一氏校注)、角川ソフィア文庫(原岡文子氏校注)、また、講談社学術文庫(関根慶子氏校注)、新編日本文学全集(大養廉氏校注)、新日本古典文学大系(吉岡曠氏校注)など。

(14) 前掲注(3)の小谷野氏著書。

(15) 前掲注(3)の和田氏著書。

(16) 『満佐須計装束抄』の同箇所では、童女の汗衫、相、表袴以外の衣の寸法が記されていないが、下仕の衣が「五尺五寸」(約一六五センチ)と記されているのは、相の短さを知る為の参考になるだろう。

(17) また、絵合巻における冷泉帝御前での絵合や、螢巻における六条院での競射の場面でも、催しを彩るべく列席した童の装束は、相の色について記述している。

(18) 前掲注(3)の和田氏著書。

(19) 前掲注(1)の拙稿。

受贈雑誌(四)

国語学研究	東北大学文学部国語学刊行会
国語教育論叢	鳥根大学教育学部国文学会
国語国文学	福井大学言語文化学会
国語国文学研究	熊本大学文学部国語国文学会
国語国文学報	愛知教育大学国語国文学研究室
国語国文研究	北海道大学国文学会
国語国文論集	安田女子大学日本文学科
国語と教育	大阪教育大学国語教育学会
国語と教育	長崎大学国語国文学会
国際日本文学研究集会会議録	国文学研究資料館
国文学研究資料館紀要	国文学研究資料館
国文学研究資料館年報	国文学研究資料館
国文学攷	広島大学国語国文学会
国文学研究	早稲田大学国文学会
国文学研究ノート	神戸大学研究ノートの会
国文学試論	大正大学大学院文学研究科
国文学踏査	大正大学国文学会
国文学論考	都留文科国語国文学会
国文学論叢	龍谷大学国文学会
国文学論叢	白百合女子大学国語国文学会
国文学論叢	鶴見大学日本文学会
国文鶴見	